

2017 文庫開館日のお知らせ

★開館日は通常は第3日曜と前日の土曜です★

- ◆7月は通常15日(土)、16日(日)の両日と16日16:30~19:00(於:伊豆高原駅広場)
「第17回海の日のおはなし会」
17日10:30~12:00(於:沙羅の樹文庫)
「第11回開館記念子どものためのおはなし会」
◆8月はちょっと長めの開館
17日(木)~20日(日)※日程を変更しました。
◆9月は通常16日(土)、17日(日)の両日
◆10月は4週目21日(土)、22日(日)の両日
◆11月は通常18日(土)、19日(日)の両日
◆12月も通常16日(土)、17日(日)の両日

文庫の時間
土曜日は14:00~17:00
日曜日は10:00~15:00

☆毎月開館日の日曜には、10:30~11:45
子どものための小さなおはなし会があります。

★おはなし沙羅の勉強会
毎月開館日土曜11:00~13:00
よみかせの練習・本選びの勉強にもどうぞ!



満潮になると胸まで海につかる六地藏(彦岐)

沙羅の樹文庫 0557-51-3737
http://www.saranokibunko.com

沙羅の樹文庫だよ!



鳥山がついた 於:玄界灘(博多~彦岐へ、フェリーで)

夫が指さす先に、海が盛り上がり、そこにたくさんのカモメが群がっていました。この下では、大きな魚が小魚の群れを見つけたのでしょうか。5月の若葉のころのおはなし会で、河津のIさんが語った稲取の伝説<はんまあさま>を思い出しました。・・・不漁が続いたある日、沖に鳥山がついた。すわ、大漁!!と、漁師たちが鰯を漕いでゆくと、鳥山の下には、戦いに敗れ討ち死にした数多の武士の亡骸が後の上に。漁師たちは魚を獲るのをやめて、武士の亡骸を弔った。それ以来、大漁が続いた。今でも稲取では、9月9日重陽の節句に「はんまあさま」を祀る行事が続いているそうです。

すみっこにいました
すみっこでまるくなくなっていました
ころがゆっくりになるのです……
すみっこはやっぱりおちつきます
<小Z(千葉)> <とぼのしっぽ>から

当たり前のごとくに気がつくのに時間がかかる
……年を取るごとのいいことひとつです
<福岡伸一>

ともに「折々のことば」(鷲田清一選)

同感、同感と頷きます(さ・ら)

文庫あれこれ◆マイルが貯まったので、6月末に、思い立って1泊で彦岐へ行ってきました(今回は私が主人の分も出しました、勿論航空代のみ)。飛行機は福岡まで。博多港から彦岐(郷ノ浦港)まで、のんびりフェリーで行きました。悪天候を予想していたのですが、渡る玄界灘は青い空に夏の雲。2時間気持ちのよい海風に吹かれ気分は十分。もっとも彦岐は前日50年に1度の大雨で、土砂崩れで通行止めの箇所が。池、川、畑は泥沼化。それでも、美しい白砂の浜辺から見る海はどこまでも碧。◆今日、7月6日、九州(彦岐も)は大雨で、各地、人々は避難、行方不明者…。(のちに多数の死者を知ること。ご冥福を祈ります。)◆橋梁が見事に?根こそぎ倒れて、線路が川に。自然の脅威を忘れてはいけませんね。◆東京の空模様は晴れ、高温真夏日ですが、数日前の都議戦で激震。◆彦岐の帰り、偶然、博多は祇園山笠の初日。博多駅で。すごいお祭りのようですね。◆文庫が始まった頃から熱心に通って、たくさんのお本を読んで、それを楽しそうに話して下さった最高齢のIさんが、1月に101歳の誕生日の数日後、天寿を全うなさっていたことを知りました。足を悪くされてからは、スタッフMさんが気に入るような本を届けてあげて。最後の数年は埼玉のお嬢さんのところで



過ごされて、眠るように旅立たれたそうです。Iさん、あなたはお年を召されても知識欲、読書欲を持ち続けられた。あなたのように、天に召される最後であるよう、努力したいと思います。文庫を楽しんでくださってありがとうございます。◆今月は、通常の文庫のほか、伊豆高原駅での「海の日のおはなし会」、<開館記念子どものためのおはなし会>があります。東京から語りに来てくれる友人たちの他、地元のコラスグループが歌ってくれます。豆落語家S君と常連になったAちゃんも語ります。駅までお出でをお待ちします。◆今月から新年度です。よろしく願います。◆どうか、天災、人災の少ない日々でありますよう。(西村)

2017年7月に読んだ本についての感想

2017.7.13 by 森林浴

『夫・車谷長吉』 高橋順子著 文藝春秋社刊 2017年5月第1版

車谷長吉という作家は直木賞を受賞した割には、あまり知られていないのではないと思うが、私は昔、白洲正子が、着物・陶芸・ガラス工芸・仏像などの世界で世にまだ知られていない面白い作家を見つける名人であるとして注目していたとき、白洲が小説家の中で車谷を発見し推奨したので、そのまま車谷を読み出してこれは凄いと夢中になった経緯がある。車谷の代表作は「霊堂の匙」「赤目四十八瀬心中未遂」などであるが、とにかく滅多にない作風・叙述で忘れ難い強烈な個性の作家である。しかし個性が強すぎて、こんな人の嫁さんになる人がいるのだろうかと思っていたら、なんと1993年(今から24年前に)結婚していたのだ。その嫁さんになったのがこの本の著者。

著者は、1944年生まれ、現在73歳、東大仏文科卒の詩人で、1993年49歳で48歳の車谷と結婚した。その結婚生活のてんやわんやを書いたこの本は面白い。車谷は2015年5月、著者が散歩から帰宅したら、留守中に解凍した生のイカを丸のまま飲み込んで誤嚥性窒息死していた。

『アトミック・ボックス』 池澤夏樹 著 毎日新聞社発行 2014年2月第1版 (続編「キトラ・ボックス」も在)

この著者は小説「スティル・ライフ」で1988年に芥川賞を受賞したが、その後自分一人で世界文学全集を編集し朝日賞を受賞した才人である。

この作品は、終戦後平和主義に徹して来たことになっている日本だが、実は政府がこっそり原子爆弾を作る計画を立て、いくつかの会社から優秀な技術者を集めて極秘裏に研究を進めてきたが、ある事件があつてすべてを終了することになり、計画から解放された技術者の何人かが密かに計画の資料をコピーして持ち出した、その資料を巡ってのその後の世に知られない事件を想定して小説にしたものである。面白いところはその秘密資料を持ち出した一人の男が病死し、秘密を知った30歳の娘がその

資料を持って上京して、計画の核心にいた大物政治家や大物アナキストに面会して事実を確認しようとするが、公安警察がそれを知って資料を取り戻そうとする、その駆け引き・追及のプロセスが、まるで映画みたいに瀬戸内の島々を舞台に展開する。

秘密資料(CD)を持った娘の逃亡ルート・方法など、実に奇想天外で、瀬戸内海の島々を警察の追手を振り回して逃げまくり、遂に上京、目的を達成するその過程は愉快でもある。

この原爆製造計画の中心にいた男が実は北朝鮮のスパイだったと言うところが「落ち」だが、それにしても北朝鮮のミサイルに脅かされているこの頃、一読の価値がある小説かも知れない。

★森林浴さん読者は「今月入ったおとぎの本」のあとに。

本の書評・紹介文は毎月(可能な限り)森林浴さんと、3か月に1度・北海道の亜子さんへお願いしています。

『終りの日々』 (高橋たか子 みすず書房 2013)

亜子 記

——神と格闘した人——

本書は2013年7月に81歳で亡くなった作家・高橋たか子さんの最後の著作です。2006年6月15日から2010年6月26日までの日々を公開されることを意識して書き残したもの。完全原稿ではないので、彼女にしては珍しく繰り返しや未整理の文章もあり完成度は低いのですが、鈴木晶氏による充実した解説も含めて高橋たか子という作家の最後の日々を知ることができる貴重な記録です。

たか子さんは、最初は『邪宗門』や『非の器』など全共闘世代には教祖とまで祭り上げられた作家・高橋和巳の夫人として知られていました。原稿の清書などで和巳氏を支え、生活費も稼ぎ、ジュリアン・グリーン(訳)の翻訳などもこなす才女

でした。

しかし、彼の死後は女流作家としてめきめき頭角を現して『空の果てまで』『誘惑者』『ロンリー・ウーマン』『怒りの子』『きれいな人』など、多くの文学賞を受賞しています。この日記でもそのことに触れています。日本の女流作家としてはめずらしく哲学的で観念的な小説を深く激しく厳しく鋭く描き、人間としても求道者のような生き方を貫いた人だったと感じています。ですが、読者には本当の意味で理解されたとはいいいがたい作家だったと思うのです。それは彼女がカトリック信仰に深く突き進んでいったことと関係があります。1980年代は一年に二度ほど日本に戻るだけで、ほとんどの日々をパリのベネディクト会に関係する観心修道会の修道女としてストックに、ただ神のみを求めて格闘したようです。それらの日々から生まれた『亡命者』『土地の力』『装いせよ、わが魂よ』は傑作で、私はとても好きな作品でしたが読者を選ぶ小説だな、とも感じていました。パリに住んだ1980年代末に、たか子さんは観心修道会をめぐる人間的なトラブルに巻き込まれ90年代には日本に戻って来ました。しかしパリでの十年近くの闘いの日々は彼女を鍛えました。「旧約聖書」創世記32章に神の祝福を得ようとして朝まで「神の人」と格闘し傷を負ったヤコブの記事があります。たか子さんも神の核心を掴み取るうとして激しく格闘し心の深いところで神を掴み取ったようです。

本書で、たか子さんはフランスを賛美し、日本を俗悪として徹底的にけなし、孤独だ、誰も話をしない人がいないと嘆息しますが、かえって彼女らしく感じました。ただ一つの慰めは『聖書』とスウェーデンボルグの『霊界日記』だったようです。

彼女の死は突然で、老人ホームの階段で倒れていたところを発見されました。心不全で、すでに事切れていたとのこと。彼女の人生の終り方は、まるで旧約聖書に出てくるエノクやエリヤのように、神様がさっと攫うように奪うようにして「霊界」へと連れて行ったと思えません。

17年7月に入った子どもの本

絵本

- 『うしかいとおりひめく中国の民話』(君島久子 訳 丸木俊絵 偕成社) ID12463
 『たなばたまつり』(松成真理子さく 講談社) ID12484
 『おたすけびとのにちようび』(なががわちひろ 文 コヨセ・ジュンジ絵 徳間書店 2017) ID17465
 『ちいさなたいこ』(松岡享子作 秋野不矩絵 福音館書店) ID12474
 『もしもほくのせいがのびたら』(にしまさかやこ 作 こぐま社) ID12477
 『小さなきかんしゃ』(グレアム・グリーン作 エドワード・アーティゾーニ絵 阿川弘之訳 文化出版局) ID12466
 『リンゴとカラス麦』(フランク・アッシュ作 山口文生訳 評論社) ID12467
 『パパ、お月さまとって』(エリック・カール作 もりひさし訳 偕成社) ID12468
 『赤神と黒神』(松谷みよ子作 丸木位里絵 ポプラ社) ID12469
 『かみながひめ(むかしむかし絵本)』(有吉佐和子 作 秋野不矩絵 福音館書店) ID12470
 『きんいろのしか-ハングラディッシュの昔話』(アーメド・ジャラル作 秋野不矩絵 福音館書店) ID12471
 『みつつのねがいごと』(マーゴット・ツェマック 文・絵 岩波書店) ID12478
 『雪原の勇者-ノルウェーの兵士ビルケバイネルの物語』(リーザルンガ・ラーセン作 メアリー・アゼアリアン絵 千葉茂樹訳) ID12472

- 『わらべうた絵本』(赤羽末吉絵 偕成社) ID12476
 『なつのかわ』(姉崎一馬写真 福音館書店) ID12473
 『はるにれ』(姉崎一馬写真 福音館書店) ID12475
 『くだものと木の実いっぱい絵本』(ほりかわりまこ 作 あすなろ書房) ID12464
 『かわ-絵巻じてひろがるえほん』(加古里子さく・え 福音館書店 2016) ID12485

よみもの

- 『ちいさなはなのものがたり-しろつめくさのはな かんむり』(斉藤洋作 浅倉田美子絵 偕成社 2017) ID12481
 『水はみどろの宮(福音館文庫)』(石牟礼道子作 福音館書店) ID12480
 『世界を7で数えたら』(ホリー・ゴールドバーグ・スローン作 三辺律子訳 小学館 2016) ID12479
 『エベレスト・ファイル-シャルオアたちの山』(マツト・ディキンソン作 原田勝訳 小学館 2016) ID12482



左は旅で見つけた現代風姫だるま?、右は古風な愛媛の姫だるまです。

- 『宮武外骨一頓知と反骨のジャーナリスト(別冊太陽 日本人のこころ 250)』(平凡社 2017) ID17115
 『権力と孤独-演出家蜷川幸雄の時代』(長谷部浩著 岩波書店 2017) ID17127

- 『神社めぐりをしていたらエルサレムに立っていた』(鶴田真由著 幻冬舎 2017) ID17105
 『田園回帰8 世界の田園回帰-11 力国の動向と日本の展望』(大森彌ほか編著 農文協 2017) ID17108
 『ハイン-地の果ての祭典』(アン・チャップマン 著 大川豪司訳 新評論 2017) ID17106
 『知らなかったほくらの戦争』(アーサー・ピナード 著 小学館 2017) ID17103
 『世界の産声に耳を澄ます』(石井光太著 朝日新聞出版 2017) ID17104
 『子どもたちの階級闘争-ブロークン・ブリテンの無料託児所から』(プレディみかこ著 みすず書房 2017) ID17107
 『ポピュリズムとは何か』(ヤン・ヴェルナー・ミュラー 著 板橋拓己著 岩波書店 2017) ID17101

文庫

- 『図書館の魔女1~4』(高田大介著 講談社文庫 2016) ID17111~17114
 『戦後日本のジャズ文化-映画・文学・アングラ 岩波現代文庫 2017』 ID17116
 『山と村の怖い話』(平川陽一著 宝島社文庫 2017) ID17117
 『人間とは何か』(マーク・トウェイン著 大久保

- 博 角川文庫 2017) ID17118
 『狐愁の岸上・下』(杉本苑子著 講談社文庫) ID17121,2
 『忘れられた日本人』(宮本常一著 岩波文庫 2016 : 60刷) ID17123
 『アキラとあきら』(池井戸潤著 徳間文庫 2017) ID17124

新書

- 『作家的覚書』(高村薫著 岩波新書 2017) ID17109
 『儒教に支配された中国人と韓国人の悲劇』(ケント・ギルバート著 講談社+α新書 2017) ID17110
 『知性の顛覆-日本人がバカになってしまう構造』(橋本治著 朝日新書 2017) ID17130

劉曉波の作品 文庫にあります。

『最後の審判を生き延びて』 ID7845
 『現代中国知識人批判』 ID7665

このところ、獄中病状悪化で、新聞紙上を賑わしている劉曉波の本が何冊か文庫にあります。購入時、気にかけて入れたのですが、読んでいません。同様に未読の方、読んでみませんか。

17.7.9 付けの朝日<日曜に想う>欄に、H. D. ソロー『森の生活』中「太鼓の音に足の含むぬものをとがめるな。その人は、別の太鼓に聞き入っているかもしれない(鶴見俊輔訳)」を軸に据え、鶴見、劉曉波、茨木のり子などの言葉と共に、生誕200年のソローの良心とは、<必要ときには権力や権威に向って「王様は裸だ」と叫ぶ気骨>では? と福島編集員が書いていたことが、今般の施政者を見るにつけ、日頃、ことなかれで生きている私にも伝わってきました。(さ・ら)

今朝 14 日ネットニュースにて劉さんの逝去知りました。病氣報道からあまりに早い死ですね。

17年7月に入ったおとなの本

フィクション

- 『カストロの尻』(金井美恵子著 新潮社 2017) ID17098
 『星の子』(今村夏子著 朝日新聞出版 2017) ID17097
 『かがみの孤城』(辻村深月著 ポプラ社 2017) ID17095
 『ホサナ』(町田康著 講談社 2017) ID17094
 『我がパラダイス』(林真理子著 毎日新聞出版 2017) ID17093
 『遠縁の女』(青山文平著 文藝春秋 2017) ID17120
 『わたしたちは銀のフォークと薬を手』(島本理生著 幻冬舎 2017) ID17125
 『福袋』(朝井まかて著 講談社 2017) ID17128
 『宮辻葉東宮』(宮部みゆき著 講談社 2017) ID17129
 『謎-キニャール短編集』(パスカル・キニャール 著 小川美登里訳 水声社 2017) ID17096
 『双子座の星のもとに』(ロザムンド・ピルチャー 著 朝北社) ID17119

エッセイほか

- 『物語論-基礎と応用』(橋本陽介著 講談社 2017) ID17099
 『読書で離婚を考えた。』(円城塔著 幻冬舎 2017) ID17126
 『ハナメグサ和歌の誘惑』(笹公人著 小学館 2017) ID17102
 『開高健-生きた、書いた、ぶつかった!』(小玉武著 筑摩書房 2017) ID17100

★森林浴さん本の感想 続き

『第20回「伊豆文学賞」優秀作品集』 羽衣出版刊 平成29年3月発行 第1版

伊豆文学賞の本はここ数年文庫で買っていたいて読んでいますが、今年は小説・随筆・紀行文部門で4編、メッセージ部門で6編選ばれたことになっている。今までは小説は小説部門で選ばれ、随筆部門・紀行文部門・メッセージ部門など各部門でそれぞれ優秀作品を選んでいただいていたように思うが、今年からは何かの理由で大きく2部門でまとめているらしい。もともと分類に無理があったのではないかと、私も以前、余計なお世話ながら、出している羽衣出版社に、今の分類はおかしいのではないかと、そもそもメッセージ部門とは何なのか、と手紙メールを送った記憶があります。今年の小説・随筆・紀行文部門の最優秀作品は「熱海残照」という熱海の一隅で生きる初老男・初老女の物語で、熱海という一寸特色ある小都市での老い始めた人の生き方を2011年の東日本大災害に絡めて描いた庶民の生活譜。賞金は100万円。私は佳作の小説「白粉花」が丹那トンネル開削工事に絡んだテーマで面白かったが、構成・展開などがもう一つまとまっていないのが欠点だったとされたのか、最優秀作品にはならなかった。



ストロア 旅の楽しみは 知らずに食べ物に巡りめぐらされる 甘露